

けだった。そうした流れの最終段階の時代と見ていいと思います。ざっと見ても、八〇年に熊本でやり、八四年に名古屋でシンポジウムが開かれた。(加古注 七六年に東京、七七年に京都、七八年に札幌でもやっています)

八二年には東京でやりますが、これは僕が委員長をやりました。塚本邦雄、岡井隆、寺山修司の世代が安定した評価を得て、さてその次の世代がどうか。僕とか春日井建、小中英之とか昭和十年代生まれが年齢的に中心になったわけです。

加古 時代は過ぎてしまったのですが、前衛短歌の方法論が廃ってきて、そこで、こんなんじゃないかだめだと言っているあたりのことをちょっとだけ伺いたいのですが。

(幸綱先生は) 角川の『短歌年鑑 1980年版』で「私たちの時代の表現」という文章を書かれています。その中で、短歌の独善性に対して強く批判をされています。「細部の技術的辻褃合わせが必要以上に重視される」「もういい、という感じがある」と。そして「本質論、時代論、状況論を、大いにやるうではないか。私を超

えて、本質を、時代を、状況を問う歌を作るうではないか」という提案をされています。「主題の新しさ、意識の根源性を問われるに耐える作が、実際に短歌史を推進して来たのである」「前衛短歌以降の方法重視の時代の末期的症状が瀰漫ひびましている歌壇(略)にあつて、実質的な短歌史は方法の時代から主題の時代へと既にスタートしている」と論じています。

幸綱 なかなか勇ましいな。塚本邦雄さんたちの前衛短歌と違うものを出そうよ、出したいよということだったんです。

加古 前衛短歌が一つの時代を作ったんだけれど行き詰まってきた。じゃ、何をしていったらいいか。

幸綱 そのまま前衛短歌を太らせるのではなく、何か新しい方向性を示したいということだったんでしょね。キーワードは主題でしょう。日記のような歌ではなく、主題を持った歌。そういう歌のあり方を思っていた。

▽アツという間のウーマンリブ

幸綱 八〇年代を振り返ると、無視できない

大きな山が、ウーマンリブだった。歌壇にも若い女性歌人たちがどつと台頭してきた。今野寿美さんとか……。

黒岩 河野裕子さん、松平盟子さん。

幸綱 阿木津英さんとか、元気のいい女性、才能のある女性が次々に出て来た。ちようどウーマンリブ運動と時代的に重なり合うかたちになった。一時、マスコミもウーマンリブ運動一色になったのをおぼえている。運動に乗って歌壇でもじゃんじゃん新しい問題提起が出来るかなあと、俺だけじゃなく、みんな思ったと思う。そんなときに、『サラダ記念日』が出たんだね。『サラダ記念日』は、とくに新しい女性像とは無関係だった。最初は、女性像が古すぎるという批判が強かったりした。自分たちの問題をいろいろなかたちで開花させようとした時期に『サラダ記念日』が出て、調子が狂っちゃったんだね。もつたいなかった。

黒岩 時代がちょっとふっ飛んじやったんですね。

幸綱 男性はあまり被害がなかった(笑)。あれは短歌史の不思議な現象だったね。